

こわい人その3

2020.9.9

逃げ出したくなかったとはいえ、自分で申し込んだ手前、嫌とは言えず、とりあえず1回目の研究授業に臨むことにした。1回目のねらいは、とりあえずやってみて課題を明らかにするというものであった。授業後に、あのこわい方からのご指導があり、「課題はこれとこれとこれだから、2回目はまずこの課題をクリアしてみよう」というようなお話をいただいた。

そして、2回目の研究授業では、クリアすべき課題のことだけを考えて授業を行った。学習指導案はというと、いくら紙面を埋めても、どんどん朱書きの線で消されていった。「どこにでも通用するようなことしか書かれていない。どこにでも通用するということは、どこにも通用しないということだ。指導案にはチャレンジがないとだめだ。授業者の思いがないといけない」

確かに、自分の指導案を読んでも、当たり前のことが当たり前のよう書かれてあった。このとき、私はようやく指導案の1枚目の重要性を知ることになったのである。

3回目の研究授業のことは、今でも鮮明に覚えている。自分なりに工夫をし授業に臨んだ。50分間のうち、30分まではうまくいっていた。ところが残り20分間はだめだった。事後のご指導でも、あの方から「30分まではよかった」と言われた。

4回目が最後の研究授業となった。今まで以上に指導案作成の段階で何回も指導をいただいた。この程度の指導案では、このくらいの授業にしかならないと、あの方はわかっていたのだと思う。加えて、1対1のマンツーマンの指導役を引き受けた以上、それなりの結果を出さなくてはならないという思いもおありだったことと思われる。

要するに、あの頃の私は、あの方の要求水準には達していなかったということである。それでも、自分としては、今までの授業とは違う感触を得ることができた。すべてあの方のおかげなのである。

4回に及ぶ研究授業の取り組みは、報告書として〇〇市内の小中の先生方全員に配布されることとなった。私の実践記録のページには、あの方が発した名言やアドバイスがたくさん載っている。今でも読むと勉強になる。

結局、私はあの方に指導していただき、大変運が良かったということである。だめな研修者ではあったが、お陰様で、自分としては、「授業というものはこういうものなのか」ということがわかりかけてきた。ちなみに、「授業改善専門講座」としてスタートした〇〇市教育実践センターのこの事業は「教師塾」として名前を変え今も続いている。

私の場合は、明確に平成14年度の1年間で自分の授業を変えた、いや、変えてもらったと言える。授業改善ではなく授業改革であった。それまでの私は、いろいろと勉強し、工夫はしてきたつもりだったが、根本的に「わかっていなかった」ということなのである。

憧れの先輩にもこわい人にも共通するものは、深い深い教材研究であった。私には、最も大切なその部分がなかったのである。表面的な指導法の工夫にばかり目が行き、生徒はそれなりに活動し、楽しそうに授業に参加していた。「活動あって学習なし」とは言わないまでも、それに近かったのかもしれない。結局、びびりながらも、「こわい人」に出会えなかったらと思うと、感謝の気持ちしか湧いてこないのである。出会いに感謝である。

(次号に続く)